

對馬政治郎「明治三十七八年 日露戦争従軍実録 禁破毀」

原 田 敬 一

〔抄 録〕

青森県南津軽郡野沢村出身の對馬政治郎が記した、日露戦争従軍日記の翻刻紹介。

キーワード 對馬政治郎、日露戦争、従軍日記、青森県、野沢村、

浪岡町

はじめに

古書店で購入した史料で「明治三十七八年 日露戦争従軍実録 禁破毀」と題された一点が手元にある（野紙で四一丁）。著者は「對馬政治郎」とあり、どうも青森県南津軽郡野沢村の村長を務めることになる人物のようだ。この史料には、従軍日記の前後をボール紙表紙で綴じた後に、「請願書」（昭和三年九月二六日付）、「大脇技師へノ返書」（大正六年一月二二日付）、「伊藤代議士へ發送セル書面」（大正六年一月二二日付）、「代議士諸君への依頼状写」（日付なし）、「明治四十二年冬季作業課題 地方尚武心ヲ發達セシムルニ最良ナル手段方法ヲ詳述セヨ 解答者 歩兵中尉 對馬政治郎」（明治四十二年四月三〇日付）、「リング検査復活同盟会趣意書」（日付なし）が紙綴りで

加えられている。日露戦後から青森県のリング栽培の改良に努力した人物として知られている對馬政治郎と想定される。村の名望家であった對馬は、予備役中尉としての訓練を日露戦後も受け、一方でリング栽培に熱心な篤農家として活躍し、村長としての重要な役割も遂行したと思われる。まずは彼の日露戦争従軍記を翻刻し、広く学界に提供したい。原文のまま翻刻するが、句読点がないため筆者が補った。段落分けは原本にあるが、冒頭一字あけを加えた。

對馬政治郎「日露戦争従軍実録」は約二万字、四〇〇字詰め原稿用紙で五〇枚に及ぶ大部なもので、日露戦争に従軍した一将校の克明な記録となっている。紙の種類が途中で変わっていることや、字も変化しており、最後の方は日本海海戦の月を「六月」と誤記していて気づかないまま終わっていることなどを考えると、戦場でしたためのメモ

があり、それを「明治三十九年誌之」とまとめ、清書したのである。

この史料の冒頭に書いてあることから、對馬の軍歴が判明する。對馬政治部は、弘前市に師団司令部のあった第八師団に属し、歩兵第三一聯隊第九中隊に配属された。召集当時は少尉で、召集後の一九〇四年一月三十一日、歩兵中尉に任官した。名望家の出身でもあり、おそらく一年志願兵であったと思われる。召集以前の同年三月、「戦時事務」見習いのため、約五週間歩兵第三一聯隊で訓練を受けているのも、予備役少尉の証書を受け取っていたためであろう。第八師団は、一九〇四年六月七日動員下令となり、充員召集が実施された。對馬も六月一〇日召集令状を受け取り、弘前の歩兵第三一聯隊の兵営に入った。すぐには出発せず、訓練と演習を続け、弘前から鉄道で出発したのは九月四日だった。大阪に着いたのは三日後の七日。大阪市内に分宿し、一カ月後の一〇月五日、大阪港から伊予丸に乗り、門司港に寄ったのち、九日金州半島の柳樹屯に上陸した。第八師団は、沙河会戦後の戦場に送り込まれ、予備隊となったが、翌年一月には黒溝台の激戦に参加する。第八師団はロシア軍の重囲の中に追い込まれ、第五師団などの救援によってそれを脱出した。聯隊長・大隊長・中隊長や将校・下士官の損失が大きく、對馬も一九〇四年一月末に中尉になっていたが、翌年三月中隊長代理、四月一三日第四中隊長、ついで衛生隊第一中隊長に任じられている。

激戦を乗り切った對馬は、随所で亡くなった戦友への哀悼の言葉を綴っている。多くの命が失われる戦闘のさなかにあつての追悼の意志は重い。生還した對馬は、村内で名望家の一人として働き、一九二〇

年代には南津軽郡の野沢村村長になっている。

野沢村は、一八八九年四月一日の村制施行により吉野田村・郷山前村・樽沢村・銀村の四カ村が合併して誕生した。吉野田村と樽沢村の一字を取り村名の「野沢」がつくられ、村役場も大字樽沢に置くなどこの二つの村が大きかったのだろう。二代目の村長に對馬常三郎(一八九九年第一回南津軽郡郡会議員選挙で郡会議員に当選している)が就いており、對馬一族は村内名望家の有力者であったと思われる(以上、葛西善一『浪岡町史』一二八頁、津軽書房、一九八六年四月)。

野沢村は、一九五四年二月浪岡町・女鹿沢村・大杉村・五郷村と合併し、浪岡町になる。浪岡町は、二〇〇五年四月青森市と合併した。

一八九一年調査による陸軍省「徵発物件一覧」は、野沢村を戸数三三戸、人口二、一七一人(男一、〇六八人、女一、〇四九人)、馬匹一五〇頭と記録している。

東奥日報社が一九二六年三月に調査したデータでは、對馬政治部は、野沢村において、戸数割多額納税者の第三位(七五円)、所得税多額納税者の第四位(四九円二〇銭)、家屋税多額納税者の第三位(三一円三四銭)に数えられている(「青森県各市町村大観」東奥日報社編『御大典奉祝・創業四十年記念 青森県総覧(一名青森県四十年略史)』九八八頁、東奥日報社、一九二八年一月)。同じ史料によれば、野沢村は、一九一二年の戸数四二二戸、人口二九四九人で、一九二七年には四五四戸、三一六六人である。田四二三町、畑一九七町を有し、主要生産物を米とリンゴとする典型的な農村であった。次のように説明されている。

田四二三町余、畑一九七町を有し、随つて主要物産は米と林檎で、米は八千石、苹果は二万箱以上に及ぶ。其他大豆、馬鈴薯などあれども金額は少い。尚本村は猿賀村と共に県から養蚕村として指定せられ熱心家もあるから養蚕は将来注目に値する。外に山林原野七百九十五町歩を有するので林産物の産額も多い。

『昭和更生青森県市町村大観』(二二一頁、東奥日報社、一九三五年七月)によれば、野沢村は戸数五七二戸、人口三九三三人と、一九二七年より戸数で二六%、人口で二四%増加している。生産高は次の通りで、對馬政治郎は村會議員(一二名)の一人だった。

主要生産高 米 一七万八九七四円／林檎 六万八〇〇〇円／
菓加工品 一万五〇〇〇円(同書)

東奥日報社編『青森県人名録』(同社、一九三七年七月)八二頁では、

對馬政治郎 六二(歳) 勲七 農業 元村長 元消防組頭 元
青年団長 後備歩兵中尉 現村議 県産業統制会理
事 小作調停委員 樽沢

との記載がある。

【史料】

(ボール紙の表紙) 明治三十七八年／日露戦争従軍実録／禁破毀

(目次) 征露従軍記目次

動員／灘波ノ滞在／各所名勝地ノ遊覧／出帆／劈頭ノ演習戦后ノ原／
敵前ノ呑氣／陣頭ノ新年／戦闘ノ序幕 六台子附近ノ奇襲戦／黒溝台

ノ苦戦／黄臘陀子ノ前哨／未曾有ノ大決戦(奉天附近ノ大会戦)／凱旋

(本文) 征露従軍記 明治三十九年誌之 對馬政治郎

動員!

明治三十六年の暮れ露西亞伐ツベシとの声大和民族の一角より起れり、時の衆議院議長河野広中の主戦彈劾上奏文によりて議會は解散せられ、戸水寛人外七博士の上奏文によりて益々世論を沸騰せしめ風雲は刻一刻毎に危急の色を増すに至りぬ。果然明るる三十七年二月六日宣戦の 大詔渙発せられ海陸同時の充員下命となり、軍の一部は瞬く間に出勤の緒に就きぬ。予亦軍籍の末尾に列し、切磋扼腕の慨なきを得んや。

我が野戦第八師団は六月七日を以て動員下命となり、予は全十日野戦隊の一員として令状に接し、親族故旧に勇ましき名残を告げ熱誠なる村民の歡送を受けツ、歩兵第卅一聯隊第九中隊に編入しぬ。中隊長は歩兵大尉須賀富治郎、中隊附は歩兵中尉大川秀雄、歩兵少尉大野定次郎、特務曹長石川春治、曹長小野寺長藏等なりき。入隊后予は直ちに中隊の被服装具受領返納委員を命せられ繁劇なる動員事務に執筆しぬ。

是れより前き予は全年三月頃戦時事務を見習はんかため自費を以て歩兵第卅一聯隊に見学し約五週間熱心軍事学の講究に従事せり。

動員事務も廳かて計画の如く進行し、且ツ終了すれば各隊の演習は平時の如く繰返され、殊に耐戦の体力を養ふべく強行軍夜行軍等最も頻繁に行はれ啻ならぬ当年の暑氣に加ゆるに斯くの如き非常の演習絶

え間なきものからラムネ水等の市価を高めたる位にて、各兵は殆んど奔走に疲れん計りなり。予の中隊長須賀大尉の如きは聯隊第一の演習好きなりしを以て部下一同は牛馬の如くコギ遣はれ、演習嫌厭病に罹らざるものなきに至り、只管出戦の命を俟ツのみ。

盛夏の候午后九時弘前を出発し、十和田湖に行軍す。半途より予と大川中尉とは路上測図を命せられ崎嶇たる山路を重き武装にて測図し道路は僅かに人跡を印したるのみ。繁茂せる潤葉樹林の間を縫ふて行くものから測板に流汗淋漓として流れ、氣息絶えん計り空腹の余り予は山間の一茅屋に入り粟飯と生胡瓜一本とを得僅かに飢を凌ぎ、鼻を衝くか如き山又山絶えんとして亦頭をなし、八甲山の経路を辿りて中隊に合せしは正さに暮煙十和田湖面を閉塞せり。

輜重の一隊も予等と全日に此地に行軍し人馬共に疲労し八頭の馬匹を谷間に墜落せしめて其半ばは既に死しありたりと云ふ。

灘波の滞軍

光陰は去れり。師団は九月初旬大阪へ出向の命を受け全四日住慣れし屯営を出発し、予の中隊は勇ましき軍旗護衛隊として市人の歓送に浴して搭乗せり。列車の一進一止万歳の声止むなく、可憐なる小学児童の唱歌楽隊アーチ等各々意を込め誠を以て歓送し、若き妻老ひたる親等血の涙を以て停車場に狂ひあるき、其夫其子の行をして益々悲壮ならしめたり。人誰か情なからんや。車窓の内と外より生別兼死別の握手は到る処人の目に映したり。人世の悲劇何者か之れに比すべき。

幾多の運命を乗せたる列車は間断なく南下し、饒別の酒肴に飽きたる勇者を大阪梅田停車場まで運びたり。時正さに全月七日。

予等は全市南区順慶町二丁目山中平兵エ方に投宿せり。我師団兵は温良にして骨格偉大なるを見るや、歓俟厚遇到らざるなく宛なから己か愛児を見るか如く、アンサン豪ふオアマスサカヒとか、我等の聞き慣れぬ言葉のみ多く、日に二度を必酒を饗して予等の労を慰し茶菓子も朝夕取り換へて出しなど有ゆる方法を尽されたり。予等は其親切に飽かん計りなり。

言葉の通せぬものから滑稽なる事のみ多かりき。或宿舎の兵卒の如き、家人より入浴の便を受くるときは、先きに入るを互に譲り合ひきて謂へり。是れを言葉の通せぬものから熱くも水を呼ぶに措なく、冷くも火を容れんことを請ふ勇氣なきより熱ひときは浴せずして其儘上ると云ふ。呑氣者道中膝栗毛にもありそうな事共なり。ドウトン堀をドンブリと謂ひ、湯屋をブバヤと謂ふなど顎の落ちん計りなり。されと都人は田舎兵士を嘲笑せず馬鹿氣扱ひせず。否な斯かる無邪氣なる程気でも却而都人士の熱誠なる歓迎を受けたるなり。

都人士の厚志は一時的にあらずして予等出発の折りは各戸競ふて饒別の酒集り、或は心尽しの送り物等不粹の勇士をして戦場に馳駆するときと雖大阪を第一の譚柄としたるもの由因なきにあらず。

各所勝地の遊覧

屯営にありてさへ、日夕伝へらるゝ号外に他師団他部隊の華々敷戦鬪の状を一日も早く現在の我身に來れかしと俟ツ恋かれたるに灘波の巷に遊びて茲に一ヶ月何れも正さに財布の底を叩かんとする、辛らき

前途に未来の戦場を現に夢見して可ならんや。夕べの納涼には屋上高き物干場に昇りて遙か西南の空を眺めては脾肉の嘆に打たれたり。

此間に記憶すべきは聯隊の創設時代より永く予等の生命を支配したる聯隊長児玉軍太の榮進せられて他隊に転せられたるに在り。

大阪市の特色は商人の多きなり、街路の狭きなり、人心の優長なるにあり。予等は暑き秋の日に黒き冬服を着けて長き行軍の後其地にて有名なる住吉神社に詣で熱さを忘るゝラムネを呑みたることもあり。

堺市に趣き過ぎにし万国博覧会の名残りの宏大なる建物を見心地よき海水浴もなしたり。四条畷に到り小楠公の靈碑を仰き拝したることもあり。京都に趣き旧御所を拝し清水寺の勝景に見惚れ、清水焼を購ひ四条河畔に弁慶を忍びたることもあり。神戸に行軍したる際、路傍に我等を迎ひたる群衆の中に若き女の小児を抱きなどして顔を蔽ふて涙にムセブものを折々見たり。言はでも知れむ。之れ名譽の戦死を遂けたる未亡人の哀れる姿ならんか。予等は神田附近の住居にて日本唯一の酒造家辰馬に投宿し大コップにて秘蔵の冷酒を饗せられ舌鼓打つて甘露々と呼びたり。陶然として行旅の夢暖かなり。神戸にては土地の内外紳士達予等を公園に招きて樽ビールの清冽を供せられぬ。

出帆

予等の入る所出る所斯くも歓送迎に忙殺せられんとし、去れど大阪病院にある白衣の病傷兵に遇ふて未だ寸功なき我身の斯かる心遣りを享けては何となく裏恥かしくも気苦しくも思はれ出戦の期の一刻も速かれと国民に対する未来の報恩の追想せられたり。

果然予等は神戸行軍の帰途、乗船出発の命を受けたり。死を見る帰

るか如き一行の勇士は宛なから故郷に帰るの心地を以て心の駒は業に既に戦場に馳せ硝煙彈雨の状目前に浮ぶか如し。

忘れんとして忘るゝ能はず。予等は十月五日出戦すべく大阪を辞したり。築港には六千三百噸の伊予丸は予等を搭載せしむべく埠頭に横はれり。埠上の人は白布を振り、旗を挙げ、声を絞って予等の行を壮んにせり。午后一時伊予丸は黒煙を引ひて虎の如く嘯き万歳の声と相和して陸を離れたり。陸上の人は虫の様に動き小豆大となり、終には有ゆる光景怒れる波を以て遮きられ軀の片影さへ見えなくなりぬ。

六日午前九時石炭搭積のため門司に寄港。石炭積は若き男女数十人端舟より端舟に手より手に石炭籠によりて大船に運ばれ其迅きこと風車の如く我等の変化を喜ぶ目を喜ばせり。

七日未明門司出港間もなく澎湃たる大洋に漕ぎ出でぬ。予は鳥の籠にある如く船中の各室を駆け廻り灘波滞在中の奇談に惜しからぬ時を移し、室に入りては囲碁将棋、室を出てゝは輪投げ等に余念なかりき。波心高く甲板を嘯まんとするとき、兵卒を集めて軍歌を初めぬ。一上一下小山の上を走るか如く波濤の響き軍歌の声を拉し去り、終には人々の匍這ふまで荒れに荒れにしを以て軍歌を止めぬ。

去れど夜は静肅ならざるを得ざりき。金州丸か露艦のため無残の最後を遂けたる以来海上の不安殊に甚しく警戒のため一切の燈火を用ゆること能はざるため人々を狸の如く床中に埋るべく余儀なくせられたり。

時を追ふて無聊は迫れり。輪投げも厭になりたり。碁将棋は無論のこと、茲に於て有ゆる役者芸人を食堂に集め、尺八、秋田オンド追分

節、都々一、落語、祭文等演せられ内地兵營にてはあり得べからざる芸を仕了したり。殊に秋田オンドの勇壮にして節の面白きものなかりき。馳れる船中の演芸の興も亦格別なるもの。

近く送迎する遼峯の既に満州領との事。予等の任地は旅順か沙河か北韓か茫漠として知るに^{マダ}椿なし。

上陸

九日午后二時柳樹屯に上陸。遙かにダルニーを眺む。四面は只見る赤裸々の地宛ながら焼山を見る様。苦力は鞭声高く車馬を叱し異息烈しく鼻端を襲ひ目目は殺風景不潔奇体を以て満たされ、予等は兎に角上陸后直ちに又銃休憩す。土人塵だらけの籠に黄色な梨卷煙草マツチ等を載せマツツクへなどと日本語を可笑しく唱へ客を呼ぶこと切なり。煙草は兎に角塵に埋もれて黒変せる梨子や菓子金を付けでも喰れそうもなかりき。当夜予等は程もあらぬ露兵の駐屯せる怪けなる兵舎内にアンペラを敷き野獸の如く横はれり。

柳樹屯に西洋料理店あるとの事を聞きたる予等五六名相携へて見物がてらに出掛けたり。会話本片手にコックと覚束なき会話を試みたるもアクセントの悪しき為めか何等通ぜざるも可笑かりき。漸く一椀のオムレツに一杯のビールを飲み帰路に就けり。暗を辿りて帰路に就けば遙か西南方に当りて間断なく火光の閃々するあり。壯觀論んものなし。此れ即ち血の雨を降らす旅順の総攻撃なり。

劈頭の演習戦後の原

戦争以外に予等の生命は演習なり。十日未明出発し、南山を攻撃点として大隊演習を初む。形の如く演習も畢り、予等は昼食を取るべく

此血腥き新戦場に登れば山上の標に曰く

明治三十五年五月念六日

攻南山戦死

大日本帝国第二軍忠勇将校下士卒瘞骨之処

南山は巾深共に八百米突位の小陣地、西面近く海を控へ四方を瞰制するの利は絶へて見るべからざる好陣地なり。丁たる岩石は悉く弾痕を印し露兵の屍尚ほ野犬の掘る所となり、醒氣人に迫る。弾片衣服の破片骨骸等所々に散在し、当時激闘の光景不言の裡に説明せられたり。

当日金州城内に宿營す。門を入れば豚舎両側にあり、奇息腹中に徹底す。室に入れば更らに一層の不潔と悪息を浴せ掛けらるゝ様我れ知らずの後引込せざるを得ず。寧ろ屋外に起臥するの氣楽なるを思ひたり。土地に日本式洗湯ありとの事に行ツて入りたるに浴槽はセメントを以て造り流し場にありて汚穢を去れば汚水悉く浴槽に還元し、其不淨さ言語に絶す。日清汚穢交換所とも謂ふても適称ならむ。

十一日金州を出発。予は貨物積載委員を命せられる。他は無蓋貨車に一車三十六名の割りを以て大根漬の様に押込まれぬ。胡坐を掻いた儘小便にも立たれぬ。生憎の雨は雲を引いて降り天上さひも見ることも出来ず。石仏の如く往生しぬ。壮烈なる戦場を理想とせる神州男子にあらざれば出来得ざる芸なり。

所々の古戦場を送仰して十二日遼陽停車場に着すれば大釈迦の西村鑑太治氏か全駅長を勤むるに邂逅。即日鷺房に入る。

十四日夜半の夢を破られ北進、大隊長閣中に立ツ。宣言して曰く、予の大隊は名誉なり。聯隊の先駆者として本日某方面に急進の命を受けたり。汝等其れ努力せよ。

一千の部下肅として誓ふ。午后三時煙台停車場着。捕虜百余を見る。雄大なる風采、獍猛なる服裝、何んとして斯かる怪物に勝たるゝものぞと各人は言ひ合したる如く思ひたらん。然り。去れど緊肝の士道は見る影もなけん。看板仆れとは是れを言ふならん。俟て漸し。近き将来に於て御手並見せてやろうぞとは一兵士の気概なりけり。

砲声は歩を進むに従ひ近く、沙河附近の大会戦なるから我死傷者既に一万以上に及びたりとの事にて苦力数百名分捕列車の後押をなし、傷者を運び来ることも切らず。包帯に染めたる生血の色は日章旗の鮮かな色の如く弱きものゝ心を引き立つるには好個の材料ならん。嗚呼戦争は野蠻なり非道なりとの声は何れの処にてか響きあるものゝ如く。去れど戦ひを避けんとすれば此れ以上の野蠻此れ以上の非道に屈從せざるべからざるものを。

師団は満州軍總予備隊たるべしとの命あり。我隊は山窩舖に宿営、小隊よりは竹内軍曹独立下士哨として全村々端に派遣せられ天地暗澹、前面の砲銃戦手に取る如く聞、少時恰かも迅雷暴風雨併来し雷鳴砲声相和して天地兩界に戦いあるものゝ如し。

十五日滞在。野に出ツれば豚軍所々の畑地より出て、予等は畑地に演習中多数の野豚か畑地より出てにしにより、支那の豚は野生にてあらざるかと思ひたる位にて遠く所有主を離れたる豚は予等に狩立てられ十二頭を得たり。支那巡査に残飯を呉れ支那料理を命し、鼓腹の飲を尽さんとしつゝありしに、十七日夕方即時出発すべしとの命あり。荒地に集合、散兵壕を構築し料理半ばにして残し置きたる豚を取寄せ夕飯を喫せり。午后十時月光爽かに風涼なるの時全所を出発し、龍王

廟に向ふ。忽ちにして起る怪雲は風雨となり地を舐めるか如き砲火は遠く閃めき十里街に到り村端の小河を渡渉せし頃には急霰頬を打ツて天地闇澹たり。闇を縫ふて辛ふして前隊と連絡を取りツ、殆んと無意味に泥中を行進せり。五里街東方畑地に集合せし時は霰は益々繁けく泥濘は深く靴背を致し直立の儘暗中雨中の裡に往生せん計り。全身ズブ濡れとなり、雨霰は脊柱を遠慮もなく流れ、初めの程は暖を取るべく身動きもし口呻りもしたれとも終には木像の如く立往生せり。特務曹長より一椀のチャン酎を恵まれたるも酔ふものかは実に出発以来の困苦なりき。予は演習若しくは戦争中と雖斯かる天候難に遇ひたることなかりき。

翌十八日予等は五里街に入り全村北方の畑地にありて予備隊として散兵壕の構築に忙かしく低き幕営を張り警戒の耳朵には間断なく銃砲声響き水は結氷し寒月高く中天に沁み亘り眠らんとすれば寒氣腰辺を襲ひ夜襲の聞の声など手に取る如く聞ゆ。暖を取るに木片なく屑を拾ひ来て燃さんとすれば天井低き天幕内に煙充ツて居堪ふべからず。昼は日向に行きて惰眠を取りたり。斯かる生活を続けること十有三日、予の小隊よりは木村辰三郎外一名の赤痢患者を出すに到りぬ。未だ敵を見ずして后送せらるゝの不憐^{ミヤ}さ。

五里街に転宿当夜、連日の降雨のため河水にて炊事をなしたるに飯は土砂幾多混入し加ふるに異息ありて何となく心地悪しかりし后にて其河に行き見たるに人馬の死屍河中に充溢せり。

敵前の呑気

三十日東蟻蜂台に転宿以来天長節祝賀会あり。予等は前日來の困苦

(演習の)を忘れたるものゝ如くブリキの皿を作り西洋料理も出来、相撲芝居もあり、虱衣も麗かに洗はれ先以て命の洗濯をなしたり。其れよりは又もボーア戦術凍地の散兵壕構築等の演習を主とし世は飽く迄も演習世界ならんかと思はれたる位、前面の銃砲声は我等の勇気を鼓舞するの楮なく、噫々最早戦争は終結し予等はオメタ々と帰国するにてはなしかと露兵の首一ツも土産にして帰らんと誓ひし郷里の人々に對して最早手紙を出すの勇氣は出でずなりぬ。追送品は来り、甕風呂にも入ツて見ツ、出放題の事を仕尽したり。左れど肝緊金目の戦ひの鼻緒さひ見ぬ中は何として気か済むものぞ。

十一月十五日大隊長平岡茂配転せらる。大隊長は有為剔骨の人物して予等今や戦の来らんとするの刹那此好隊長に別る。

大隊長部下に對し告別の辞に曰く

正さに活躍せんとする今日に當り、諸子と別れを告ぐるは小生の遺憾とする処。予は今日悲と憂とを以て諸氏と別る。去れと后日諸子か勇名をなしたる際に於ては予は喜びと楽みとを以て諸氏と宛かも全境遇にあるかの如く感ぜらるゝならんと。

噫々隊長も日本男子、而かも陸軍大学の恩恵を受けたる一人。野蠻と文明の戦ひ、正さに明日ならんとするの期に於て突如配転を命せらる。其原因の奈何なるやは予等小臣の素より想像だにも及ばざる処、定めし血を吐くの思ひありしならん。前きには兒玉聯隊長に去られ、今亦此隊長に離る。予か心中転々寂寥に堪へず。

掩留するに従つて冬營の準備を專一とするに至りぬ。兵士は宛然人夫となり、伐木炭焼き等の作業繁多に起りたり。予等は時々遼陽に出

て買物をなすを唯一の楽みとせり。

寒氣は愈々降下して散兵壕を掘れば氷結地下三尺に迫り。

廿一日新大隊長日野浅来任。大隊之を野に迎ふ。

予等も亦名譽の中尉に任せられたり。日々の強風外に予等は宿舎の裏手にある湖上に氷滑りしたり。

陣頭の新年

荏苒日月を送ること三ヶ月。予等は茲に平和の新年を迎ひねばならぬこととなりたり。大隊は郊外に整列して遙拝式を行ふ。満洲幾十万の外征士は正装に代ふるに血染土染の戎衣にて大元帥陛下の万歳を唱ふ。式終りて聯隊本部に於て宴会を催す。宴半ばにして旅順松樹山陥落の飛電あり。茲に於て歓喜の声堂宇に満ツ……。午后十一時更らに大快報あり。旅順守将ステツセル解城の申込をなしたりと。予等は夜半再び酒を呼び快乎折舞す。急造の楽隊などを作り練り廻したるもあり。

予等は第一の難関と称せられたる旅順口の斯くも目出度き迎年の期に於て我手に歸したるを祝せんかため須賀中隊長に祝賀会を催すべきを迫りたり。去れど中隊長は他隊の行動は祝捷すべき限りに非らずとし予等の要求を斥けたり。予等何とて思ひ止まるべき。各自小隊に命令して二日夕より音楽隊やら旗行列やら訳の分らぬ祝捷会を催せり。奇怪壯絶を極む。中隊長は止むを得ず、幾樽の酒を購ひたり。胸に平素の鬱憤ある中隊一般の人心は何時か破裂せずして置くべきものぞ。庭前に炬火を焼き形勢頗る不穩なるより中隊長は大約半分の酒を呑みたる頃其半分を他へ運ばしめたり。茲に於て予と大川中尉とは其全部

の酒をも出すべきを要求せり。而して一旦解散せる分隊長に集合の命を下すや否や、俟ツに俟ツたる早り氣の下士連宙を飛んで集合するや否や電光一廻ランプは破壊せられ火針飛び土瓶舞ひ狼藉至らざるなく、敵と目指すは障子に穴を穿ちて逃げ去り、我と我味方打ツに無_レ宙なりしなり。予も鼻端に微傷を受けたり。中隊長は翌日小隊長を集めて種々問ふ所ありたるも、却ツて自ら陳謝するの止むを得ざるに終んぬ。

戦闘の序幕 六台子附近の緒戦

一月十一日午前九時第五聯隊第一第二大隊及我大隊に緊急集合の令下れり。予等は一切の防寒具に身を包み、煙台停車場にて降下、当日は迅風砂塵を巻き形勢稍々急なるを示すか如し。敵は名にし負うミツンスコの騎兵大集団にして海城停車場既に危しとの情報あり。好敵御坐んなれと戦に餓へたる我等一行は天をも呑まんす勢にて予は生来未だ嘗て斯かる活気ある群衆を見たることなし。強行軍の上予等は達道ナル村落に達し茲に村落露営す。先発の遊軍は既に篝火を挙げて幕営を張り威風堂々たり。

十二日払暁濃霞を破りて進軍し、前日来の強行軍に落伍者続出し、予は隊尾にありて叱咤しツ、僅かに落伍者の数を減ずることを得たり。西南方に当り敵の砲声旺んに起り、予等を招致すること急なるものゝ如し。当夜耿家莊子なる寒村に宿営。予は日直勤務に当れり。

本日の情報に依れば營口の重要な倉庫を敵のために焼失せられたりと。

十三日 今日こそは敵と初対面の出来得べしと勇氣面上に顯はれ出発したりしに、生憎なるかな口惜ひ哉我中隊は本隊を離れ刈家台に分

遣せらるゝこととなりたり。大望台に予の部下伊香分隊を残し、刈家台に入りたるに全所は太子河沿岸にて前日敵の渡過したりしを以て巨大なる馬蹄の跡砲車の轍等顕然たり。

土地の人民予等を歓迎すること神の如く。之れ前日露兵のため強姦掠奪殺人等有ゆる乱暴に遇ひ猛獸の如く彼等を恐れ、我日軍の到来の一刻も早かれと祈りしものなり。予等戦地に来り一百有余日に亘れりと雖露兵の罪惡を目撃したるは今日を以て初めとす。予等は斯かる可憫なる亡国の民より種々の贈物を受け、豚、鶏、牛等飽く計りの御馳走に有付けり。殊に鶏は毎戸二三十を飼はざるものなかりき。

前日来闖として砲声の響きなし。

少なる兵力を以て有ゆる方面の警備をなしツ、村民の枕を休めし予等は無事に十三日を迎へたり。起き出ツれば寒氣殊更凛酷に附近の樹木は時ならぬ銀花を咲かし河畔の風牟更らに美を添へたり。西約一里に当り銃砲声手に取る如く聞え、村民は老若出てゝ戦慄し齒の根も合はぬ程驚けり。ロスケー_一来了と微力なる予等を頼みとするのみ。戦の声は約一時間にして憩みぬ。

天地は梢の雪を落さぬ迄に静肅となれり。予等は当日の戦況を想像することだに不能なる位置にあり、例の如く豚料理を案排しツ、チャン酒を呼び歿趣味に耽りツ、あるの時、土人一名を随ひ巡察に出掛けたる中隊長は馬を走らし顔色土の如く帰り来れり。曰く、敵歩兵約三千当村を距る一里の所に到れりと。予等は残れる一椀のチャン酒に一層の勇氣を増し、急き出て集合の命を伝へぬ。土人は危急の我身に迫れるに驚き、大人々と我等に縋かり付て慟哭し、早くも避難に着手

し、馬車を引張り出し妻子を載せ荷物を積むやら牛馬を穴藏へ運ぶやら混乱目も当てられぬ始末なり。予は部下に整列を令し、先行して村端にありし堤防にありて部下の集来を俟ツ中、開河城に分遣せる佐藤分隊長より伝令来り。二ケの分捕り防寒帽子を携へて報告して曰く、只今敵騎兵五六開河城対岸の万里壕に來り、分隊は之れを狙撃したるに二名の者に命中し、敵斥候は周章、其旨を本隊に報告するや蒙塵を立て、后続せる本隊は直ちに退却したりと謂ふ。

当日津川枝隊長よりの情報に曰く、

本日枝隊方面の敵は騎兵約千五百砲兵若干にして之れに対する日野大隊は死者十二名傷者三十有余名を出し枝隊本隊の方面も僅少の損害ありしか交戦約一時間にして敵は遠く北方に退却したり一旦退却と見せたる敵は、又々迂廻して前日の渡過点なる万里壕を襲へるなり。果して予等に向ひたる敵は千五六百の騎兵なりき。若し此敵にして予等に向ツて猛進したらんには予等は必死の奮戦をなさざるべからざりしなり。俟ツに俟ルたる好敵も予等を大敵と見てか劍鋒相接せずして逸したるは遺憾なりき。我后方を威嚇せんとして御苦労にも奇襲を試みたるミツンスコ騎兵団は我敏捷なる出戦によりて見ん事失敗に帰しぬ。鶏鴨の肉にも飽へたる予等は任務を完ふし二十一日他隊と交代して元宿營地に帰還すべく接官堡及刈二堡に二泊して西藍旗なる師団司令部前に於て耳朶の劈けん計りの寒風に曝されツ、壮絶なる分列式を行ひ東嶋台なる古巢に帰れば、土人我等を村端に迎へて久闊の情に堪へざるものゝ如く帰舎せしは正さに二十四日暮色靄然として遠くより來る。

黒溝台の苦戦

一句の間寒風に曝されたる我等は再び懐かしき古巢に帰れば土人は門前に我等を迎へて其労を多とし、我等は手足も延びくゝと古き毛皮の裡に安眠することを得。明けて二十五日速かに甕風呂の要意せよと朝来追送品の恩恵に預かり、小説の口絵を評するやら内地よりの來信を閲するやら、前日に變る呑氣なり。然るに午前十時ころに至り、前面の砲声何時になく長閑ならず。誰か謂ふとなく師団警急集合なりとの報伝へらるゝに至り、前日歸來せる予等に取りては余りに突飛に聞へたり。恐らく嘘伝ならんと聞き流し居たるに、正午に至り本物の命令來れり。

黒溝台附近に於て交戦中なる後備第八旅団は目下敵と劇戦中なり。師団は急行、此れを援助すべしと

予等の正さに六台子を去らんとするに當り、我が馬賊隊より情報あり。曰く、敵の大部隊南下するの模様ありと。果然敵は南下せるなり。

六台子以來練りに練りたる我等の鉄脚は当日の強行軍にビクともせず前途の光明に微笑しツ、目指す当面に猛進し八家子に宿營すれば銃砲声手に取る如く聞え砲弾は紅舌を吐きて近く煙火の如く地を舐めり。

二十六日我が聯隊は頭泡子に向つて攻進の命を受け、降り繁れる雪耳辺を掠める北風も何のその、我大隊は黒溝台南方約千二百米突の畑地より展開し、大川中尉搜兵長となり、右翼歩兵第五聯隊と聯りて、徐々を行進したるに、前方に當り敵騎五六恰かも我れを誘致するものゝ如く正と降り繁れる雪の中に隠見したり。大隊長は搜兵の前進歩々しからねば前進不可能なれば増兵せんとしつゝある一剎那、最初

の一発はビュと空を切ツて飛來せり。來たぞと謂ふ間もなく銃砲彈雨の如く降り。予は第三次に散兵線に増加せり。彈丸の飛來宛なからポンプの如く風の如し。予等の陣地は平垣開豁にして、草一本の身を寄せる處なく目指す敵は影さへ見えす。只彈の來たる方面を射撃の目標としたるなり。我れは白雪皚々たる地に横はりて敵彈下に身を委し、予の右側面及左側には約五十米突宛を距て、土人の墳墓あり。小高き森となれるにより散兵線に就くに当り多数の兵士其の隱に居りたるも、予も真直に行けば其墳墓に居るべかりしも何となく行き心地悪しく、平垣の畑地に着せり。既にして墳墓の上にある数十本の樹木を目標として彈丸は吹雪の如く來れり。砲彈は黒溝台及頭泡の両面より右より左、左より右へと絶えず地轟きして飛來し、散兵の只最中へと命中せり。茲に於て墳墓に身を寄せたるものは頭上に破裂する彈丸のため小山も何の効なく、予等の居れる平垣の畑地に這ふて來るもの多かりき。

予は射線に就きし数分の間殆んど無我無中なりき。正さに散兵線に増加せんとするに当り行進しツ、呑みし水筒の酒も何の効なかりき。瞬く間に死傷者出てたり。予の左側にありし松原大次郎と謂ふ兵は先ツ負傷くと呼びたり。予は其箇所を尋ねたるに背中をやられました、自分「そは貴様の當ツたと思ひたる神經にあらざるか、松原「イエ、確かにやられました、冷々と血が流れて來ました、自分「然らば此后方に繃帶所ある故去るべし」と謂ひたるに、余りに彈丸の烈しき故頭を上げ得ず、去る事能はざりしか、這ふたる儘何時しか后退せり。間もなく予の左隣にありし大野少尉の從卒千葉四郎なるもの予の命によ

り射撃せんとしたるに銃を握れる両手の指手套を穿ちたる儘やられ、鮮血淋漓と流れ出て銃の杭桿はホツキと折れたり。千葉の后退するや其左隣にありたる佐藤常次郎なるもの予の傍らに近き射撃中一箇の露兵彈を拾ひ取り、予に示せるにより予は其彈は只今千葉の指に当りしもの故汝は紀念として千葉に送るべしと謂ひツ、其背に負ひたる飯盒を見たるに、悉く破壊せるを以て、汝は何時其飯盒を破壊せしやと謂ひたるに、イヤ破壊したることなしと謂ひるに因り能く見れば敵彈の命中せしを知らざりしなり。千葉の紀念たる彈丸を拾ひ上げてポケットに入れたる佐藤は間もなく其左腕を打貫かれて退きたり。前後左右死傷者を以て充たされ、后退するもの引きも切らず。各兵は発射の際の外絶えて頭を擡ぐるものなく、畑の凹みに顔面を押し込みたる儘死骸の如く身動きもせざるものから何れか死して何れか生けるものなるや區別するに緒なく、中隊長より一の号令の來るなく、時々相互に顔を見合すのみ。予は打て／＼との命令を兵より兵に伝へて号令するのみ。銃砲火の破裂のため耳は全く聾し手足は棒の如く寒氣のために萎縮し、敵は益々優勢に彈を送り、何を謂ふにも絶体絶命、我か砲兵には砲撃一時間ならざるに砲、馬共に全滅して全く沈黙せるものから敵砲は何んの氣心もなく我れを滅茶打ツにせる訳なれば命中誤らざる次第なり。【茲に於て抹消】予等の散兵線に就きてより一時間位にして彈丸雨飛の裡に戦線に立つものあり。顧みれば石川特務曹長にて大声叱呼して曰く大野少尉戦死、予は第二小隊長代理として指揮を取ると。次へて大川中尉も膝部を貫かれ后退せり。負傷者の予の処へ來り武装を解いて貰ふもの引きも切らず。茲に於て予も最後の覚悟せり。携帶の秘

密書類を悉く破りて雪の中に埋め、南無弥陀仏と思はず知らず唱へられたり。死する命の惜しからねばポンプの如く灌注する弾の中を縦横に歩行し予の処に蒐集せる負傷兵の弾丸を兵卒に分配セリ。去れと運命は我れを拉し去らす。俟ツに俟ツたる日暮れは来りて弾の音も薄らきぬ。

予等は先ツ傷者を收容すべく従卒伊藤才吉を随ひて墓地に行きたるに、何処にも彼処にも傷者の救ひを呼ぶ声呟りに、救けて！と只々声を限りに号呼するのみ。中には妻子又は両親の名を呼ぶものもあるなど修羅場とは斯くの如きを申すならん。予は大腿と折れたる一等卒丸山初次郎と右手甲の粉碎し顔面の黒焼となりたる葛西傳八郎(下士勤務)の二氏を背負ひて救護中、敵砲弾は暗を縫ふて五六発我が頭上に浴びせ掛けたり。予等は辛くも救護の目的を達し、死せる大野少尉以下を安全の地に收容し一方には警戒のため二名宛の歩哨を近く銃前に配置せり。大隊長も多分やられたるならんとて須賀大尉は此れか代理せんとて予に中隊長代理を命し行けり。予は警戒兵及死傷者運搬兵の外手許にあるは従卒伝令のみにて其心細きこと生来未だ嘗てなし。試に左翼に至り他中隊を廻り見たるに、折り重ツて死せるもの算なく、其間に重傷者は雪上に坐し、或は這ふなどしてウン／＼と呻吟し、湧出せる血は零下二十三度の寒気のため流れすして氷結すると云ふ有様。残れる健康者は僅かに一団をなして死傷者を守るのみ。我大隊のみにて死者二百有余名即ち約四分の一、傷者約七百名、生存者僅かに三百五十名位に過ぎざりき。殊に第十一中隊の如きは十名内外の兵卒を残したるのみなりき。第十中隊も将校全部死傷し、残兵は其

行く所を知らざるものゝ如し。

戦【「死」抹消】後の悲劇は苟くも現況を目睹したるものに非らざれば想像だも及ばざる所なり。予等は傷者を收容するため衛生隊へ担架を呼びにやりたること数次に及びたるも終に一の担架をも見ずして終りたり。大隊附折居軍医及他ノ一名の軍医も何れに逃失せしや居らす(后にて聞けば折居軍医は一旦戦線に來りしも后退して敵騎のため捕虜となり他一名の多田軍医は何処にか迷ひ子となりしと云ふ。無残や傷者は充分の手当を為すに裕なく、無理往生せるもの多かりしならん。一名の傷者を天幕に載せて運ぶには七八名も懸りて【「引ツて」抹消】河の氷上を引張りて后方に運搬するの困難又とあるべからず。予の大隊は頭泡及黒溝台より十字火を受け其損害は師団中第一位にありたり。予の小隊は出戦当時七十二名の中七名の死者三十二名の傷者を出し健康者僅かに二十九名のみ。予等は緒戦に於て斯くも不利なる戦闘をなしたり。去れと東北男子の精粹とも呼はれたる立見団の勇士斯計りの戦闘に意気を挫くべきもので。生者の魂は死者に移り死者の魂は生【「死」抹消】者に移り真成の勇氣は是れより益々旺盛となれり。

当日我大隊死傷將校左の如し。

死者 副官 中尉渡辺恒次、少尉桜田英吉、少尉大野定次郎

傷者 中尉根本正、全大川秀雄、全對馬助憲、大尉鎌田宗八、全石

川勝蔵、少尉川嶋明八、中尉郷左近養吉、少尉遅塚常次郎、

少尉松尾傳吉、貴田少尉

捕虜 一等軍医折井橘弥

凍傷 少尉嶋健助

而して生存せるは須賀大尉、日野大隊長、石塚大尉、田中中尉と予と五名なりき。

予等は死傷者の大半を收容して二十七日午前二時に迫るや、其大隊は五家子に入るべしとの命あり。死傷したりと思ひたる大隊長も何時しか遠き后方の凹地より出て来たり。予等を引率して無憊なる死者若しくは傷者を残して五家子に入る。噫々忠魂義魄何れの地に迷ふならん。

五家子は戸数約五六十の寒村。予等は全村に着するや第十中隊及第九中隊を合して混成第九中隊となり、第十一第十二も合して漸く一ケ中隊となれり。五家子に着するや直ちに雪を掘りて散兵壕を構築しぬ。払曉陣地に就き敵の目標とすべき附近の樹木を切り倒させツ、ある間にスドン／＼と一声射撃を受けたり。予等は頭泡の敵を距る約五百米突の地にあり。敵の号令はエー／＼と手に取る如く聞ゆ。我れは巧みに射撃を避くることを得たり。

五家子に於ける我實力は歩兵約三ケ大隊、敵の兵数は未詳なれとも數門の砲及機関砲あり。我れより數倍の優勢なりしこと言ふを俟たす。敵砲兵は朝来五家子の中央を目懸け猛烈なる整射を送り、処々に火災起り予等は飽く迄沈黙を守れり。午前十時頃第八中隊の少尉石山仲内の小隊予の所に増加に来たり。五家子より予の所に達する數十間の間に於て既に七八名の負傷者を出せり。予は全人に前日の苦戦の情況など物語りしツ、あり。石山の去るや否や轟然と予の頭部に命中せるものあり。予は多分やられたるならんと頭に手を当て見たるも何等負傷

したる模様もなし。予の隣兵五六名も全身に土塊を浴びツ、如何に揺かせるも死せるものか返答もなし。予は予の頭上を見たるに予の頭上二三寸の土堤に砲弾命中し予の后方五六間の所に破裂せるを見たり。其の土堤の土塊か予等に当りしにて危くも一命を得たりしなり。

午前十一時我か背後に当り五百米突の所に切りに砲弾破裂せり。依て予は斥候を派遣したるに、如何なる錯誤や味方の砲兵なりとのことにて稍々安堵したるか発火の方向を凝視すれば正さしく三光堡を砲撃せる敵砲なり。右側を見れば前日予等の陣地たりし所に砲火乱下しコサツク騎兵はウロ／＼と其間を縫ふて馳駆せり。四面皆敵なり。負傷して后退するものは后方に迂回せる敵騎兵の捕虜となれり。五家子の村落は敵砲弾の乱下のため所々に火災を起して炎焰天に漲る。午后一時に至り、戦局益々進み、黒溝台を中心として雲霞の如き大軍約一里に亘り幾重にも我か前面に現はれ其西方に当りコサツク騎兵の大集団幾千となく列伍堂々黄臘陀子方面より我か背后に大迂回するの状宛ながら屏風を廻すか如し。

我等の精力は極度に達せり。先ツ当面の敵を手当り次第に狙撃せり。斃るゝもの引きも切らず。覚えす萬歳々と連呼せり。敵の前進するもの傷を負ふて退走するもの日本兵の背囊を探くるもの銃砲火の行き交ふ態等一種のパノラマなり。予等は重囲の内にありながら此大パノラマに見惚れ胸中豁如として天体に合せん計り。無論何人と雖決死の状顔面に躍如たり。

午后二時に至り、頭泡より約五六百名の歩兵徐々と行進し来れり。敵なから天晴れるものかな。予等一隊は朝来言ひ合したる如く射撃

を慎重にし殊に茲処数時間は一発の発射をもなさざりし故敵は平地を行くか如く進軍し来れり。此勇敢なる敵をして約三百米突まで引き寄せたり。其れとも知らずや敵は重き防寒杓を踏みぬしてノソリくゝと来たるや急霰の如く三方より送りたる我か猛射に不意を啖ッてか彼等は原野の只真中にノツキと立てり。見る間にバタ／＼と仆るゝもの算なし。敵はグルリと廻れ右をして小走り大走りに後ろを見せたり。負傷もせず伏したるものもありたらん。我らは敗ける彼等に向ひザマア見ろ／＼と呼びつゝアレを撃て彼れを撃てと立ツ所に全隊を滅せり。数分ならずして更らに予輩をして舌を巻かしたるものあり。敵砲車の如き一隊は頭泡を出てぬ。斯かる大損害を受けたる数分后なるに係らず平然として進め来れる一隊を双眼鏡にて凝視したるも天候險惡にして何たるやを確むるに楮なし。敵じやものと狙撃し初めたり。去れと懦れす怯れす我れに向ツて来たれるを見れば赤十字を掲げる衛生隊なり。斯く分明するに迫るに我れは射撃を止めぬ。彼れは半ば撃たれとも悠々然博愛同仁の手を延べて戦友の傷者を車上に載せ引き下かりたり。馬鹿にならぬ仕業にあらずや。右側面なる蘇麻堡方面は彼我肉薄して接戦し砲弾の集中も見覺しく何時果ツベしとも見えず。

斯くの如き現状を以て日没に至りぬ。パノラマは闇に蔽はれ兵火所々に天を焼くのみ。時刻の進むに従ひ寒さは加はりぬ。星は淋しく斯天地を吊ふかの様。午后九時敵の右翼へ抹消・斥候の壕を出つるや／＼より奇異なる一箇の燈火頭はれ其数次第／＼に増へて右翼々と移れり。或は上下或は左右に揺られたり。此れ即ち火光信号なり。黒溝台方面に當りて火災の上に奇怪なる信号も出てたり。彼れは果して

如何なる行動に出ツべきか。退却？進撃？予等は寒気のため飢餓のため全身無知覺無意識となれり。午后十時に至り静肅なる天地の一隅より微かに喇叭の響き起れり。次へてウラー／＼の関の声天地を振動せり。此れ黒溝台の敵か殊勝にも最後の決戦を挑むへく蘇麻堡に一大夜襲を試みしなり。忽ちにして砲火を開かれ銃声雨の如く劍光石火相接するの状さなきだに想見せられたり。惡魔の声は約一時間にして熄みぬ。天地は以前の如く沈黙せり。傷者の救を求むるの声は木枯の響きと相和して凄然たり。

当日予の中隊は五六名の負傷者を出せるのみにてありき。

二十八日午前五時旅団長依田廣太郎閣下は将校のみを集め皎月天心に掛れる原野に於て秘密の命令に依り若干后方に位置を転せざるべからざるに至れる旨を伝ふ。三光堡には負傷者を残置し敵手に委せざるべからざる窮況に陥れり。予の中隊は衛生隊掩護のため徐家窩棚に趣くの命を受け払曉修二堡に入りたるに敵騎兵集団の全村附近に野営したるの状歴然たり。敵の傷者の一人長槍を杖付きてウロ／＼するを見たり。予等は修二堡の村端に達したるに応援として来れる第五師団の歩兵斥候約二十名我れを見て射撃したり。予は大日章旗を掲げて味方たるの信号をなせり。彼我一の負傷を出さざりしは幸なりき。予等は徐家窩棚に達し后方部隊より弾薬を受領し来れり。全村には我聯隊の負傷將校收容されあるとの事を聞き劇務の余閑を得て予は見舞に行きたるに約二十名一室にあり。何れも包帯を掛け予を見るや異口同音に予の武運強きを羨み且ツ自分等の仇を取ツて呉れと意気更らに自己の負傷を忘れたるものゝ如し。此不幸なる群衆に對し予は何んと慰めて

よいやら分らぬ位只々気の毒の一念胸一杯となれり。予は前日の如く敵の我縛帶所に來襲せん事を恐れ茲処にありし傷者に対し一刻も早く后方安全の地に行くの利なるを告げて去れり。

二十六日戦線に就きし以來携帶の飯も酒も悉く氷結し不眠不食今日に至れり。只二十七日夕二時間位人家に入り戦死せる豚二頭を得て湯煮とし少量ツ、食したる外一碗の食を得ざりし故空腹甚しく前線に弾薬補充に赴かんとする際民家に粟のあるを発見し予等の帰來迄に之れを炊き置くべしと命じて弾薬を各兵に力一杯に背負はしめ戦線に赴かんとして村端を出てたるに左側面より轟然と敵砲兵の発射せるなり。

而して第三発目には予等一隊の只最中に命中し四名の負傷者を出せり。中隊長は予に隊の指揮を委せるにより予は何故に斯かる少数の兵に砲弾を乱下するやを不思議に思ひツ、右側面を見たるに第二師団の大集団は密集隊次の俣堂々又整々と徐家窩棚を出てたるに對し敵は砲射せるにてありき。最初の数十発は予等を目標としたるも次第に砲口は第二師団の集団に轉し其真中へズドン／＼と破裂し兵卒の仆るゝもの手に取るか如し。聯隊長は先頭にありて悠然と馬を進め少しも騒げる気色もなく弾丸の来る方向を睨みツ、戦闘命令を副官に口授するの態度神々しかりき。

正午に至り戦闘益々激烈にして何時果ツべしとも思はれず此時第二師団砲兵も堂々として来る。既に第五師団及第二師団の來援ありて戦線に入り予等は萬人の見方を得たり。戦況回復も期も近きにあらん。予等は弾薬補充の任を全ふして再び徐家窩棚に歸來し半煮の粟飯に醬油エキスを掛けて食ひたる。味は未だ嘗てなき甘味なりき。殊に萩原

特務曹長より貰ひたる半杯の日本酒の味たら何んと譬へんものもなし。数日來の空腹を医して再び戦線に出てんとすれば既に薄暮の頃なり。三光堡に着すれば人馬の死屍往來に充溢して通行に難する位なりき。其れより五家子に行進の途上激しき夜襲の響き約一時間も継ぎ、其れより暫くにして傷者の互に友を呼び暗を辿りて此方だ／＼と呼びツ、来るもの無数なり。聞けは我二大隊は当夜頭泡に向ツて夜襲を試み無憚や全滅の厄に遇ひたりと。予等のへ一字抹消・頭へ五家子に入りし頃は傷者收容の最混雜なりき。

三日三夜眠らず食はす飲まず休まざるの奮戦其効空しからず。二十九日払曉予は聯隊より斥候として森伍長以下数名を率ひ頭泡に赴けるに前夜夜襲せる我戦死者の頭泡の敵を距る五六間の所にて枕を並べ朱に染りて眠れるものゝ外敵の片影をも認むること能はず。幾多の死者の中に只一名の負傷兵あり。予を視るや長大息して曰く残念なことします敵は今曉三時頃退却しました我軍は今少しく早かりなば敵を全滅せしめかりしにと。露兵の抛れる乱雜なる掩堡を一見しツ、予等は進み／＼土台子に至れば退走せる敵の後尾を遙かに前方の村に隠見したり。茲に於て予等は確實に土台子を占領し各隊は隊伍の整頓のため其れ々々宿營地に就きぬ。予等は徐家窩棚に入れり。斯かる苦戦の後に最も心淋しく感ぜらるゝは幾多の戦友を喪へるにあり。次に感ぜらるゝは我身の萬死に一生を得たる僥倖なり。茲に於て予は更らに感ぜるものあり。斯く身の僥倖を得たるは必竟する処我が祖先の余徳に外ならず。祖先の人に対する仁慈の恩沢の積みて我身に迄余慶の廻り來れるなりと深く／＼感謝の一念を發せり。

今回の大捷忝くも 天聴に達し優渥なる勅語を賜はりたり。一同深く天旨に感激す。

予の中隊に従軍僧三名来りしを以て予か中隊は庭前に祭段を設け大野少尉以下の遺骨遺髪を安置し葬祭式を行ふ。

確實なる情報に依れば黒溝台に於ける我死傷一万二千(死者一千二百) 敵の遺棄したる死体千八百捕虜五百、

幾多の愛らしき戦友を喪ひたる予等は戦後の整理をなしツ、心細く気淋しき生活を送れり。殊に戦友大野少尉と予とは渡清以来夜寒を凌ぐため終始同衾したる程なりしを今や幽明界を異にし其特意なる薩摩琵琶をも聞くに緒なし。父兄の悲嘆も左こそと察せられたり。予は自分の間其声を聞くか如く其姿の髣髴たる如く感せられたり。雪は消え四方は春めけり。田中少尉の許へ小鳥網来れるを以て予は同氏と共に附近を狩り時ならぬ獲物に打興しツ、次きの戦ひを俟ツ俟てり。

黄臘陀子の前哨

二月二十一日予の中隊は前哨勤務のため黄臘陀子に趣けり。同村は戸数五六百を有する大村にして守備の一ヶ小隊は黒溝台戦の劈頭不意に敵の包囲する所となり全滅の厄に遇ひたりと謂ふ。斯かる大警戒面に予の中隊と第十二中隊とは殆んど不眠不休の姿勢にありて前哨勤務に服せり。当時予は悪性の感冒に罹り鼻腔及咽喉より夥しく出血なければ他人と交代すること能はず。二昼夜に亘り勤務を継続せり。

敵の騎兵及歩兵の集団は予等の前方約二千米突にある前蟬虎峯子及茨楡陀方向に当り土塵を蹴出て五月蠅きこと限りなし。夜間は彼我歩

哨の出入頻繁にして予等は敵の歩哨前に絵はかきを立ツるなどの悪戯をさえないたり。

二十三日予等は前哨下番となり五家子に入る。当日敵線に当り大風船揚れり。彼れは右より左に徐々と飛行し我か陣営を瞰下しツ、あり。此後の行動果して如何なるべきか進撃か果た退却か。

未曾有の大決戦(奉天附近会戦)

二月二十五日、旅順より来れる乃木將軍の率へる第三軍は予等の後方約十里の地にあり。前進の準備既に整へ一字抹消…備へたりとの情報あり。

二十六日聯隊に補充兵四百名到着。中隊には志賀少尉以下六十名分配となり、第十中隊及第十一中隊は新編成をなすに至りぬ。

此夜我軍より敵陣地を見舞はんかため巨大の砲弾を送れり。敵も此れに応せり。聯隊は二十七日より第二軍予備隊を命せられ同夜蘇摩堡にあり。二十八日古城子に転ず。朝来砲声熾なり。三月一日大台に向ふ。銃砲声益々劇烈となり奉天総攻撃の端緒開かれたり。二日沈亘堡に集合、銃砲声殷々として百雷の碎けるか如し。天候怪秩忽ちにして大風雪となり当日長灘方面最も劇戦にして予は大台北端にあり。樹上に楼を作り戦況視察の任にあるの時へ二字抹消…偶々続々傷者来り曰く第五師団は敵と接触し全滅の厄に遇ひツ、あり、予の分隊は分隊長以下悉く死傷せりと。宜なるかな第五師団は敵を距る約百米突の地にあり。敵の十字火を受け全師団の五分の二を喪ふるに至れりと。苦戦の功空しからず。我軍は予期以上の効果を収め敵は大退却を初め予等は追撃に移れり。三日大韓台に村落露営し此村落は沙河戦以来敵

の冬營せし地なれば敵は村落の支那家屋を洋風に改造し其の前面には糞の山を築けるものあり。四日揚家堡に入る。迅風砂塵を巻き行路難を極む。五日夜蘇胡堡に入り第四十二聯隊の一ケ中隊と同村の警戒に従事す。第二軍砲兵予等の対岸にあり。朝來彼我の砲兵の交戦目醒しく蘇摩堡の東方約三百米突の所には敵の倉庫燃焼し凄愴の觀あり。全夜歩兵第二十一聯及予等と全村にありし。四十二聯隊の一ケ中隊とは合して前面の二台子に夜襲したるに敵情不詳なる我隊は敵の包撃する処となり負傷者続々出て、予等の宿舍に來り残余の一隊（一ケ中隊限り）払曉退却し來れり。前日予等と談笑を交へたる第四十二聯隊の一ケ中隊の大部は此夜襲に於て全滅の厄に至りぬ。人命も亦モロキものならずや。

六日師団の予備となり曹家屯に入りたるに前日來の戦にて我聯隊の將校殆んど残りなきに至れりと。七日日野少佐は聯隊長代理として魚鱗堡に趣き須賀大尉は大隊長代理予は中隊長代理を命ぜられたり。

九日第三軍応援のため大石橋に趣きたり。十日大石橋にあり休息中附近に彈丸の落下絶へず。予等の休息せる家屋内には二頭の馬匹五六の兵士負傷しありたり。予等はは大石橋西端にあり。休憩中予等の附近に砲彈の破壊すること烈しく偶々予の中隊の一伝令卒は第五聯隊の一補充兵に誤射せられ其彈丸は伝令の心臓を貫き予の頭上空を切つて飛び去れり。

正午予等は日向に出て大戦を夢見ツ、ありし間に突如として耳朶を打ツものあり。曰く敵は奉天を捨て大退却を初めたり、旅団は急駆追撃に移り奉天停車場を占領すべしと。予等は勇みに勇んで大石橋を出

すれば村端の只平原に第三軍の砲兵は百に余る巨砲の列を布き奉天に向ひ盛んに発射しツ、あるの状壯觀又と觀るべからず。奉天の方向に當り黒煙朦朧として立登り壯觀何物か之れに比せん。我大隊は中隊縦隊の促進軍し轉灣へ一字抹消・轉へ橋に入らんとするとき右側面より銃砲火を受け若干の危険を覚えたり。されど数回の劇戦を蹈過せる予等は此時にありて胸裡亘々として平地を行くか如き思ひをなしツ、轉灣橋を出て徐々に展開進撃の歩武を續けたり。此間銃砲彈予等の周圍に砂塵を立て、落下し予の中隊にも五六名の負傷者を出せり。進軍約半里にして奉天城門は巍然として天の一角を磨し我軍の入場を迎ふるものゝ如く、一方には奉天停車場附近の兵火長さ約一里に亘り敵の兵器糧秣倉庫の燃焼するの状未曾有の壯觀なり。午後二時に至り我隊に第五聯隊長より伝令來り。予等は其方向に応援して長驅へ二字抹消・行軍へ進撃せり。到る処敵屍及傷者を見ざるなく傷者の我等を仰き見て繃帶を差上げ手当を歎願すること切なり。予等は斯かる薄命者を見る毎に悲みの情五臟に込み渡れり。

北陵附近に至り黄昏となり、其位置にありしに予等の前方にありし村落の前方に黒き土壁の如きあり。へ三字抹消・依て斥へ凝視すれば人垣の如く動けるか如し。依つて斥候を派遣したるに果して敵にて二百の捕虜を得たり。夜に至り予等は奉天北方の停車場に到る。茲に第五聯隊の松平大隊あり。予等は鐵道線路の傍らに在りて線路の枕木をへ一字抹消・焼へ焚き分捕りの砂糖、及牛の生肉等に舌を鳴らしツ、惰眠を得んとしツ、ありし間に何処よりともなく幾多の捕虜火光を見て予等の所に蟻集し來るもの引きも切らず。予等は終へ一字抹消・雨

カ、夜捕虜狩りに従事し約一千の捕虜を師団に後送せり。

十一日 午前八時露營地を撤し約一里前進したるに敵の捕虜隊をなして白旗を翻しツ、来るもの多し。前進路上道側には死体やら転覆せる車輛やら斃馬やら傷者やら其他の武器装具路上一面にあり。宛なから一大勸工場の如くへ一字抹消・敵、敵の兵数五十万に余り戦線四十里に亘れる大軍の退走せる状如何に混乱せるやは想像せられたり。斯くして未曾有の大決戦として世界ノ耳目を振動せる奉天戦も終局を告げたり。予等は十有余日に亘り一回も顔を洗ひし事もなく時には煙草まで欠乏を告げたることさへあり。顔手足は真黒となり敵の捕虜の如きは一人として虱の付かざるものなり。悉く眼腐れとなり不眠不休如何に難戦苦闘せるか計り知れざる位なりき。殊に奉天退却の際の如きは第三軍は彼れの翼背に近く陣を布き有名なる乃木將軍は挺身三軍を叱咤し砲兵も歩兵も携帯弾薬全部を発射すべしとの厳命により雲霞の如く蒙塵する大軍の只側面より一斉に猛射を加へしものから其大部は多大の損害を受けて再び立つ能はざるの窮状に陥りたるなり。午后六時第二軍は隊伍整頓のため後方にありて休養すべしとの命に接し、觀音屯に至りて村落露營せり。十二日丁香屯に転宿。補充兵一千名へ一字抹消・兵、當聯隊に到着。予は十三日第四中隊長を命せられ即日赴任、新編成に着手せり。十五日我滿州軍總司令官大山大將閣下は堂々と奉天に入城せり。此役にて捕虜六万を得敵の死傷十五万分捕品無數との情報あり。敵の公報に遺棄したる砲五百門とあり。此会戦の戦捷天聴に達し第二軍に感状及優渥なる 詔勅を下されたり。第八師団及後備歩兵第二聯隊及第三師団は感状を授与せられたり。

二十一日予は衛生隊第一中隊長を命せられ二十二日官家堡子に着任せり。以来戦後の隊伍整頓に忙殺せられ時々祝捷会紀念会等催された。五月三日師団は第二軍の第二線として前進すべしとの命を受け姑文屯に転宿せり。二十日北方の村落に向ツて行軍を行ふ。西方約五里に当り砲声を聞く。敵騎三千例の奇襲を試み我兵站線を恐喝したるものならん。依田支隊は此敵に向ツて進撃の命を受け衛生隊第二中隊は此れに従ふ。敵は間もなく退走したりと謂ふ。

六月^マ二十八日旅順応援として約半年以前主都を離れたるバルチック艦隊は二十七日以来我艦隊と對馬沖にて交戦、第二第三艦隊全滅、其兩提督は捕虜となれりと。不覚快乎を呼ぶ。大杯を挙ぐ。奉天決戦以来海戦は尚ほも一問題となり居りしか此快挙により最早戦局の大幅落を告げたりとも謂ふべし。

六月一日予等は姜家窩棚に転宿せり。此時に當り講和の説叨りに高まれり。九月九日^マ講和談判を米國に於て開かれ休戦の命あり。講和反對の國民大会は日比谷公園に開かれ官庁の焼打事件等あり。内地にては騷擾を極め居るも戦地は休戦の姿勢にある事として長閑なる日月を送らざるべからざるに至りぬ。此間に於て演習及熟續調査に目を廻しツ、終に三十九年に亘りぬ。予は二月六日大連及營口見学の途に上り、營口旅順口及大連の各古戦場を吊ひツ、内地より取寄せたる写真器により此等の古戦場及各市街を撮影せり。旅順は聞き以上の要害の地にて巨万の資を投して造營せる要塞に向ひ之れを攻撃したる乃木軍の困難左こそと想像せられたり。

(凱旋)

三月九日我隊は凱旋との命あり。全五日予は乗船委員長を命せられ下士以下二名を率ひ十有余月に亘り住み慣れたる姜家窩棚を后にして村民の惜送を受けツ、鉄嶺発車、大連に向ふ。十二日加賀丸に乗船し、十七日無事青森港に到着す。茲に於て初めて母の懷ろに入りたる赤子の如き思ひせられたり。十八日上陸すれば慈父と久闊の対面を得、未だ嘗て涙を下さゞりし勇士も百感交々至り嬉し涙と感謝の涙とか湧くか如かりき。

予は固より決死の覚悟を以て従軍したるに聯隊の定員將校は六十幾名に過ぎざりしに八十幾名と謂ふ定員以上の死傷ありしに係らす予は僥倖にも万死に一生を得たるのみならず只一日の病臥をもせずして此重任を果たしことを得たりしは一には天地の恩、二には大元帥陛下の恩、三には父母並に祖先の恩と深く胸裡に刻まれたり。

(はらだ けいいち 歴史学科)

二〇一五年十一月十六日受理